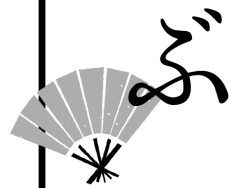


# 古典落語に学ぶ



落語家

立川談四楼

## 第三十八回 松山鏡

その昔、越後（現在の新潟県）の松山村には「鏡」というものがありませんでした。ある時、この村の正助という男が、特に親孝行であるという理由でお上から褒美をもらうことになります。

正

助は村役人の前で言いました。

「両親の墓参りを毎日欠かさないのは当たり前のこと  
で、褒められるなんてとんでもない。だからオラ、カネも田地  
田畑もいりません」

困った村役人はこう言います。

「正助、どんな無理難題でもよいから申してみよ。きっとお上の威光で叶うぞ」

こ

「えっ、どんなことでも？」  
「そうだ」  
「だったらオラ、十八年前に死んだ父っつあまに会いてえだ。会わしてくれろ」

れは無理な話です。そこで村役人は名主に尋ねます。

「正助の父は何歳で亡くなった？ 四十五とな」  
「正助の現在の歳は？ 四十二か」

「で、両名は似ておるか？」

「瓜二つとの評判でございます」

村役人が何やら支度をし、正助に言います。

「父に会わせてやるぞ。この箱の中にいる」

正助が恐る恐る箱の蓋を取ると、そこには初めて見る鏡がありました。

「あれえ父っつあま、ここにいたのけえ。会いたかったよ。あれ父っつあま、嬉しいと見えて泣いてござる。オラも嬉しくて涙が止まらねえだよ」

そ

の鏡を正助はもらいました。そして鏡には『子は親に似たるものをぞ亡き人の恋しきときは鏡をぞ見よ』との歌が添えられていました。

正助は鏡については他人に話すなと村役人から言われましたので、納屋の古葛籠に鏡を隠して、朝に夕に「行って参ります」「只今帰りました」と、お父っつあんへの挨拶を欠かしませんでした。

様子がおかしいと異変に気がついたのが女房のお光で、ある日、正助が野良仕事へ出た留守に、古葛籠を覗きました。これまた初めて見る鏡です。

「あれま、女子がいるでねえか。どこのもんだおめえ。狸みてえな顔しやがって、人の亭主をとるツラか」と大変な見暮。正助が浮気をしていると勘違いをしたのです。

そこへ正助が帰ってきたから大変です。仲のいい夫婦が取っ組み合いの大ゲンカとなりました。

「おやめなさい」と仲裁に入ったのは、通りかかった隣村に住む尼僧（女性の出家者）です。さすがは尼さん、両者から理由

を尋きます。

「正助さんは父っつあまだと言い、お光さんはどこかの女だと言ひ張る。よろしい。では私が古葛籠を見てみましょう」

尼

さんもまた鏡を見るのは初めてです。最初はビックリし、そして何かを得心し、夫婦にこう言います。

「お光さんの言う通り、確かに女がいました。いましたが、あなた方があまりにも派手なケンカをするので反省し、頭を坊主にしています」

これが『松山鏡』です。きれいなオチですよ。原典はインドとも中国ともいわれられており、いずれにしても民話です。民話が日本に伝わり、オチのある落語となったのです。その過程を考えると、先人を尊敬せざるを得ません。

誰かが落語にすると決意し、協力者が現れ、ああでもない、こうでもないとい試行錯誤して、一席の落語が出来上がっていくのです。

今、鏡は身の回りに当たり前にありますが、この嘸の芯は、初めて鏡を見た人の驚きです。正助さん、お光さん、尼さんは、それぞれの理由で鏡に映る人を信じ込みます。

どうぞ皆さん、手持ちの鏡でご自分の顔をご覧になってください。

さて、そこに映っているのはあなたですか？